岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Arcadia

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

VOL.34

《小大君像　佐竹本三十六歌仙絵断簡（部分）》
鎌倉時代　大和文華館蔵
〔重要文化財〕

エッセイ
憧れの大和文華館

特別企画展
茶の藝術 ～大和文華館のコレクションより

岡崎藩財政改革と中根隼人忠容

レポート
日本美術教養講座

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

ESSAY

憧れの大和文華館

館長 芳賀　徹

20年あまりも昔のこと。東京国立博物館の「博物館ニュース」に、求められて「夢の美術館」というコラムの小文を書いたことがあった。「空には白い雲が…」などという副題をつけたように思う。

小高い丘の林の道をゆるやかに登ってゆくと、その奥に靜かに立っているあまり大きくない白い建物 ―なかに入れば、私の好きな絵巻物も、屏風絵も、志野や織部の茶碗も、すぐ身近におかれていて、それぞれに物語を語る声が聞こえてくるような美術館、というような内容の小エッセイだった。

それを書いたとき、私が脳裡に浮かべていたのが、（まだ岡崎市美術博物館は存在しない時代だから）他でもない奈良の大和文華館だった。そのことははっきりとおぼえている。

私は鎌倉の神奈川県立近代美術館も好きだった。東京京橋のブリッジストン美術館も大好きだった。どちらにも、学生時代からよくかよって、館長さんや学藝員たちとも親しくつきあって、ずいぶんたくさんの勉強をさせてもらった。だが、当面の研究テーマを離れて、ただ深々と古典美の陰翳のなかに心身をひたして、大きな安堵の息をつき、帰途についてみると美や歴史への新しい眼を開かれていることに気がつくというのは、当時としてはやはりどこよりも大和文華館でのことだったのである。

大和文華館の開設は1960年10月のことだという。その初代館長矢代幸雄氏の時代のことはよく知らない。蘭学史研究の仲間で司馬江漢や秋田蘭画に詳しい成瀬不二雄さんが早くから同館の学藝員をしていて、その成瀬さんをあてにして、友人たちと奈良旅行の途次に寄ったりしたのが、最初だったろうか。後には蕪村専門の早川聞多さんがいて、彼に招かれて蕪村展を見にゆき、講演をしたこともあった。そのとき、早川さんが蕪村・大雅競作の『十便十宜図』を特別に全巻ひろげて見せてくれて狂喜したことも、忘れられない。

あるときは、吉川逸治先生が三代目の館長になったというので、館長室に御挨拶に寄り、ついでに私の長男が美術史学科に進むといっておりますというようなことをお話しした。すると先生は即座に大きな声で、「ギリシャをやらせなさい、ギリシャを!」と言われた。あの声とお姿はいまだに印象深く記憶に残っている。

大和文華館を訪れる日は、春でも秋でもいつも青々としたいいお天気の日だったような気がする。近鉄の学園前駅に降りたときから、もう赤松の脂（やに）の匂いがただよっていたような気もする。それは文華館が立っている松林の丘からの匂いだったろうか。その林のなかを大きくうねって上ってゆく坂道は、まさに別世界へのいざないの道だった。松にまじってしだれ桜も咲く。椿も咲く。季節によっては笹百合という珍しい可憐な花も咲き、頭上には小鳥たちが囀る。

館の創始者たちは、矢代館長も設計者の吉田五十八氏もみなともに、ほんとうにいい町のいい場所を選び、いい空間を設計したものである。ここに中国・朝鮮・日本の古典の名品中の名品を何千点も蒐めて、一つの美の理想郷を営もうとしたのであろう。それはみごとに実現し、私たちはここを訪ねればいまなおその高い志を感じとり、限りない眼福のうちにその志を受けとることができる。

館内に入ってゆくと、建物の真中に四方をガラスに囲まれて明るい吹き抜けの坪庭があり、そこに太い孟宗竹が十数本もいつも青々と葉をそよがせている。陳列作品を眺めはじめる前に、私たちはまずここで感嘆の声をあげてしまう。このすがすがしい開放感に洗われた胸に、展示の名品群が親しく語りかけてきて、どんな遠い過去の絵画でも墨蹟でも、陶藝や漆藝の作品でも、時間のへだたりをこえて直接に私たちの心を動かす現代の美術なのだということをあらためて納得させてくれる。

展示室を一巡したあとに、またひとしお私たちをよろこばせてくれるのが、室外のテラスからの菅原池の一角の眺めである。蛙股池ともいうこの池は昔からの天然の池なのか、潅漑用の池なのかは知らないが、この一角の池畔には高く伸びた赤松の影がかがよい、その松の蔭にはちらほらといかにも瀟洒な住宅が見える。その一軒の庭先には、池に浮かべる小舟が杭に舫（あや）っているようにさえ見えたが ― あれは恍惚と羨望のあまりのまぼろしだったのだろうか。

この「夢の美術館」に足りないものといえば、前に「博物館ニュース」に小文を書いたときに結びに引いた萩原朔太郎の小品「閑雅な食慾」に出てくるような「珈琲（かふぇ）店」だけである。

林間の　かくされた　追憶の　夢の中の　珈琲店である。
をとめは恋々の羞（はじらい）をふくんで
あけぼののやうに爽快な　別製の皿を運んでくる仕組…

というような喫茶室。だが、これはないものねだりにすぎまい。

このたびの「茶の藝術」展については、大和文華館四代目館長の水田徹氏と同学藝部次長中部義隆氏の最大の御厚意と御協力を仰いだ。「夢の美術館」へのオマージュを述べて、お二人への御礼の言葉とさせていただく。

REPORT

日本美術教養講座（全四回）

「茶の藝術」展に出陳される四点を取上げ、各専門の第一線で活躍されている研究者に「この一点!」と題してお話いただきました。制作された時代背景や茶道具として使われた意義などを展覧会と関連づけて、分かりやすく熱く語っていただきました。四人の先生方にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

第一回目　6月16日（土）　絵画

俵屋宗達筆「伊勢物語図色紙芥川図」

大和文華館　学芸部次長　中部義隆氏

宗達の絵は大方スケッチできるという琳派の研究者。講演会は当日の参加者を見て内容度を決めるとおっしゃっていました。宗達絵画に共通する空間・画面構成と色彩、主題等の見所や他の琳派作品との関連性の指摘なども含め非常に濃い内容であったといえます。琳派、いや美術を語り出したら…なので心配でしたがぴったり90分。本展では多大なご尽力をいただきました。

第二回目　6月24日（日）　漆工

琳派の蒔絵：本阿弥光悦の群鹿蒔絵笛筒（重要文化財）を読み解く

徳川美術館　企画情報部部長代理　小池富雄氏

漆といったらこの先生。今回は日本人のテイストをたっぷり含んだ蒔絵作品の最高峰、この笛筒を取上げて下さいました。せまい円柱には23匹の鹿がいます。使用の貝を始め技法も細かくご説明いただき、漆工芸の奥深さ、尊さを改めて学んだ講座でした。小池先生は徳川美術館をはじめ美術館の普及活動にも力を入れておられます。講演や講座・お茶会などでお馴染みの方も多かったようです。

第三回目　7月1日（日）　陶磁

「黒織部沓茶碗」と桃山茶陶

九州国立博物館　企画課長　伊藤嘉章氏

岐阜県土岐市のご出身。三月まで東京国立博物館でご活躍でしたが、今年度から九州国立博物館へご栄転。この日もご担当される展覧会の作品集荷の真っ最中でしたが、朝一の飛行機で飛んできて下さいました。陶磁の展覧会はこの先生が関わらなければ実現できないという噂。名物・名碗はすべて手にしておられますので、講演内容も実に生っぽく今回の出品陶磁の見所も抜かりなく押さえていただき、織部ファンは大満足のご様子でした。

第四回目　7月14日（土）　書

王朝の美「石山切（伊勢集断簡）」

五島美術館　学芸部長　名児耶明氏

トリをお願いしたのは、渋い!名児耶先生です。古筆は、現代の日本人にとって外国のカリグラフィー的な美でもあり、高貴で近寄り難いイメージがあります。名児耶先生はこれまで墨蹟や古筆をはじめとした「書」について、展覧会やご著書を通して非常にやさしい言葉でその魅力を伝えてこられた書の救世主。当日は台風到来にも関わらず、東京からお越しいただきました。「日本的なるもの」の最たる石山切。書風・継紙の美しさたっぷり語っていただき、観客の皆様はご満悦!

EXHIBITION ESSAY

茶の藝術 ―大和文華館のコレクションより

会期　平成19年10月13日(土)～11月25日(日)

学芸員　杉山　明美

秋たけなわ!お茶会の季節です。ここ岡崎でも城址公園はじめ各所でお茶会が開催されています。大勢が集い一服のお茶を味わう大寄茶会は気楽に茶の湯が体験できるとあってなかなかの盛況ですが、この「一期一会」の世界もともすると流儀作法ばかりに気を取られ、席主の用意したご馳走を十分に味わうことなく帰る人も多いのではないでしょうか。

お茶会の醍醐味はなんといっても、その茶席を演出する茶道具とその取合わせの鑑賞にあります。茶人にとって茶会は自分自身、全人格を表現するハレの舞台です。茶人はその日のために何ヶ月いや何年も前から茶席のしつらえや道具の取合せをあれこれ考え、そのなかで選びぬいた美術品を用いて、私たちをもてなしてくれています。

お茶会は「馳走の芸術」と言われています。香り高いお茶、季節のお菓子とともに、点前のパフォーマンス、取り交される会話もご馳走です。そしてこれぞメインディシュ!花入や掛軸、釜、茶器、茶杓、茶碗、菓子器などやその取合わせを是非、眼のご馳走として味わっていただきたいものです。

本展は、そのご馳走を味わうためにも是非ごらんいただきたい展覧会です。

これで「あなたもお正客になれます!」よ。

財団法人大和文華館は、日本・東洋の古美術を専門とし、国宝4件、重要文化財31件を含む約2000件を館蔵する美術館です。本展はこの大和文華館のコレクションによるお茶をテーマに開催する展覧会です。

展示は「唐物の茶」「侘びの茶」「武家・公家の茶」「町人の茶」「近代数寄者の茶」と5つの章立てによって構成しています。室町・桃山・近世・近代における茶の美意識を同蔵の雙柏文庫と称する故中村直勝博士旧蔵の古文書の中から、約30人の人物の書状を選び出し、それを軸におき墨蹟・絵画・陶磁・漆工芸品で紹介しています。

「唐物の茶」

唐物とは今でいう海外もののこと。この時代の海外はズバリ中国です。

鎌倉時代に、栄西が禅宗と一緒に紹介した抹茶は、時代の最先端をいく中国文化の象徴でした。時のセレブである将軍や有力武将は、周囲を唐物で飾り抹茶を飲み楽しむことをステイタスとしたのです。必然的に唐物趣味はブームとなり彼らの唐物蒐集熱を引き起こします。室町時代といわれる陸羽の『茶経』によると「団茶」といって茶の葉を蒸し、臼でついて団子にしたものを煮出した汁を飲むことが広まっていたことから、これを遣唐使や留学僧らが日本に伝えていたようです。

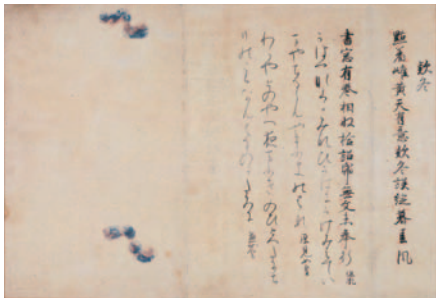
《鎗金鳳凰唐草文稜花合子》
中国・明時代

国宝　李迪筆　《雪中帰牧図》　中国・南宋時代

■岡崎の茶

さて、今回の展覧会は抹茶をめぐり、栄西をはじまりに室町～近代までの茶道史を概観しています。では栄西以前のお茶はどういう風だったのでしょうか。お茶が日本の公式な記録に登場するのは、栄西から遡ること400年前のことです。

日本の正史『日本後紀』には、弘仁6年（815）嵯峨天皇が、近江の唐崎に行幸した際に、入唐僧である梵釈寺の永忠にお茶を勧められたこと、さらに茶樹を近畿地方に植えさせたという記事があります。その飲み方は断定できませんが、中国の唐代、茶の歴史や製法・器具などについて述べた最古の茶書



《和漢朗詠集断簡　伊予切》　平安後期

平安初期、遣唐使の廃止される以前は、次にくる室町時代の熱狂的な唐物ブームほどではありませんが、唐文化が王朝貴族により文学を中心として華やかに繰り広げられた時代でした。お茶は唐文化の一つとして捉えられており、漢文学に頻繁に登場しています。『凌雲集』『経国集』などの漢詩集ではお茶が詩に詠まれており、宮廷貴族を中心に楽しまれていた様子がうかがわれます。

平安中期の漢学者、1002年に没した慶滋保胤（よししげのやすたね）は、《和漢朗詠集》にも収録され、『日本往生極楽記』の著者として知られている人物ですが、彼の残した漢詩に次のようなものがあります。

晩秋過参州薬王寺有感　慶保胤

参河州碧海郡、有一道場、日薬王寺、行基菩薩昔所建立也、聖跡雖旧、風物惟新、前有

代の日明貿易によりそれが頂点に達すると、唐物も量から質の時代へと移ります。この章では東山時代に同朋衆・唐物奉行がまとめた唐物バイブル『君台観左右帳記』の世界を彷彿とさせる絵画・陶磁・漆工芸を御覧いただきます。

「侘びの茶」

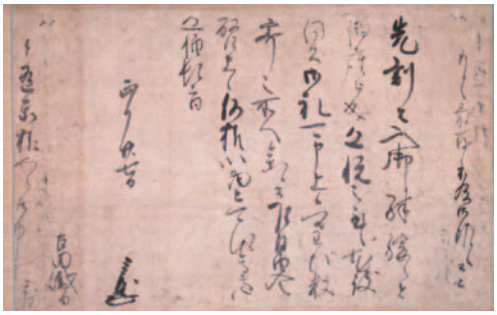
中国文化の一つとしてあった抹茶が、徐々に日本化していき、やがて「渋い!!!」という美意識に到達するまでの過程を紹介します。村田珠光、武野紹鷗、千利休がその主役となりますが、「一休頓知話」でお馴染みの一休宗純や源氏学でも有名な三条西実隆も茶の湯の侘び化に多大な影響を与えました。

またこの時代、たった一個の茶道具が何万石の知行と引き換えられるなど、茶の湯と政治が深く関わりました。

展示は茶人や武将らの書状を軸にし、時代の好尚を表す美術品を飾ります。中国的なお茶が和風化、侘び化していく様子がお分かりになることでしょう。

「武家・公家の茶」

織部・遠州・宗和を中心に展開しています。織部は山田芳裕氏のマンガ「へうげもの」でお馴染みの方もあると思いますが、とにかく既成のものは打ち破るという創造者。派手で豪快でそれでいてスマート。桃山という時代のニューリーダーとはこの人のことです。また大名茶の小堀遠州や堂上公家に迎えられた金森宗和も茶の湯を華麗な世界へ導きました。「きれいさび」「ひめそうわ」の世界をご堪能ください。



《古田織部書状　有楽宛》　桃山時代

野々村仁清作　《色絵おしどり香合》
江戸時代

「町人の茶」

江戸時代は町衆たちが文化の担い手となって活躍します。本阿弥光悦や松花堂昭乗は大茶人でありしかも芸術家。俵屋宗達も同じ仲間です。寛永期には古典復興の気運が盛り上がったこともあり、彼らは、平安王朝の風を作品に反映させました。この章では、光悦、宗達、光琳、乾山、抱一という後に琳派と呼ばれる人々が勢ぞろいします。彼らの芸術世界をお楽しみください。

尾形乾山作　《色絵夕顔文茶碗》
江戸時代

「近代数寄者の茶」

益田鈍翁、原三渓は、日本美術を救った大功労者。彼らのコレクションは名品揃いでした。それらはほとんど散逸してしまいましたが、大和文華館のコレクションは彼らの旧蔵品が核ともなっています。「切」と呼ばれる断簡は鈍翁や三渓が関わって分割されたもの。佐竹本三十六歌仙の小大君像は必見!周文・雪村の屏風絵も特別展覧します。

碧瑠璃之水、後有黄纈纈之林、有草堂、有茅屋、有経蔵、有鐘楼、有茶園、有薬圃、有僧在中、白眉颯爾、余是羈旅之人、牛馬之走、初尋寺次逢僧、庭前徘徊、燈下談話、耳目所感、聊記斯文、云爾、　　（本朝文粋　巻十　詩序）

（三河の碧海郡に一つの道場がある。薬王寺という。昔、行基が建立した所である。土地としては古いけれども、風景はいたって新鮮だ。前方は碧とも瑠璃色ともいえる水が満ち、後方は黄纈纈の林が覆っている。草堂、茅屋、経蔵、鐘楼、茶園、薬園があり、颯爽とした老僧が住んでいる。私は騎乗の旅人である。牛や馬もいる。寺は初めて尋ね、その僧と出会うのは二度目である。庭先をぶらつき、夜は談笑にふけった。聞いたことも見たこともとても心に感じ入ったので、いささかこの文を記す）

薬王寺というお寺の存在はこの保胤の漢詩からしか確認されていないようですが、その名は、薬王寺派という現在の宇頭町のあたりに居住した刀鍛冶名にかろうじて残っています。この詩から察するに矢作川を臨むその寺院に「草堂」「茅屋」「茶園」があったというではありませんか。お茶は薬として栽培されていたのでしょうか。「草堂」「茅屋」という言葉からは、それから六百年後に生まれることになる「草庵の茶」＝「侘び茶」の美意識と繋がるものが…　すでに岡崎に萌芽していた???

■岡崎の侘び茶

岡崎の茶人といえば、奥殿藩から裏千家に養子に入った玄々斎宗室（1810-1877）が有名ですが、その人物の他にも岡崎には忘れてはならない三大茶人がいます。岡崎の茶の湯の普及は、利休没後から約100年後にあたる江戸中期の元禄頃のことです。宗旦四天王といわれる一人山田宗徧の豊橋吉田藩へ出向したことから始まったといえます。岡崎連尺町の木綿問屋、太田便山（1671～1752）はその宗徧の高弟・新城の倚松軒帰誉に知遇を得たことによって茶の湯を学び、岡崎の人々に侘び茶を紹介しました。その後は、宗徧を私淑した江戸の不蔵庵龍渓（1761～1842）が、岡崎に庵居を構えるとそこを発信地に三河だけではなく遠江から尾張にわたり宗徧流茶道を精力的に広めて再興し、多くの門人を育成しました。さらに明治に入ると、龍渓の後継者で「不蔵庵二世」を名乗る連尺町の呉服商・千賀可蛟（1813～1890）が三河一円に茶の湯を普及しその功労者となっています。この三大茶人による茶の湯が今日の岡崎茶道の元となり現在に至っています。

EXHIBITION ESSAY

岡崎藩財政改革と中根隼人忠容（はやとただかた）

会期　平成19年12月8日(土)～平成20年2月11日(月・祝)

学芸員　堀江　登志実

12月8日から始まる企画展「隼人がゆく－藩政改革にかけた岡崎藩士の世界」は『中根家文書』上・下が刊行されたのを記念して開催するものです。中根家文書は岡崎藩本多家の家老・番頭を務めた家に伝来した古文書です。その中心をなすのが、中根家8代目の中根隼人忠容による岡崎藩の藩政改革、財政改革に関するものです。今回の展示においても中心的なテーマは18世紀末の寛政年間に行われた岡崎藩の財政改革です。

現代においても自治体の財政問題は北海道の夕張市の例にみられるように私たちの生活に関わる問題として存在しているわけですが、江戸時代の社会においても藩の財政問題は深刻な問題でした。岡崎藩における借財は江戸時代後期18世紀末には32万両余にも及んでいました。現在の国および自治体が赤字財政を続けながらも存続することは、江戸時代の社会において藩が膨大な赤字を抱えながらも藩が破産せずに存続できたこととある面では共通しています。

江戸時代の藩は大名個人を頂点に藩士をピラミッド形に組織し、ある面では「家」に譬えられます。藩士は「家臣」、または当時の表現では「家中」とよばれるように、大名の「家」に包摂され、藩という擬制的な家を構成する存在だったわけです。商人の「家」が破産するなかで、大名の「家」が借財により破産することなく存続できたことは、江戸時代の幕藩体制社会における支配の枠組みに支えられた面によるものでしょう。支配制度に支えられていたとはいえ、江戸時代の藩士たちが安穏に暮らしていたかというとそうとばかりはいえません。藩財政の担当係りである勝手方の役に就任すると、藩運営の資金繰りに奔走しなければならない状況にありました。今回の展示では、この大名の「家」の存続のために、勝手方の責任者として財政改革に藩士生命をかけた中根隼人忠容という人物をとりあげました。

中根家は三河国額田郡箱柳（はこやなぎ）村（岡崎市）の出身で、先祖は徳川家康に仕え、徳川四天王の一人である本多忠勝に付属されて以降、本多家の重臣として同家を支えてきた由緒ある家柄です。本多忠勝に始まる本多家は譜代大名の家として知られ、その家中には中根家をはじめとする家康時代に本多家に付属された都筑・梶・植村など三河以来の武士が多く存在しました。中根家8代目の隼人忠容は、宝暦2年（1752）6月、下総古河に生まれています。藩主本多家が下総古河（茨城県古河市）から石見浜田（島根県浜田市）へ、さらに三河岡崎へと転封を重ねるなかで、中根家も岡崎に移り住むようになります。忠容は天明元年（1786）に岡崎藩の家老となり、天明7年には勝手方の責任者となります。そして寛政5年（1793）から岡崎藩の財政再建のため、江戸商人三谷との交渉などに奔走します。

中根隼人の考えた財政再建プランは、岡崎藩5万石の収納高を6万俵とみて、そのうちの半分、3万俵を家中扶助に宛て、残りの3万俵のうちで藩出費を賄うというものです。3万俵について25俵を10両とする米相場で換算すれば、1万2000両となり、定式入用費を7500両内に抑えれば4500両の余剰金を生む計算になります。このプランを実行するために、厳しい倹約を敢行するともに、江戸両替商である三谷喜三郎の支援を受けます。しかし、現実にはこのとおりにはゆきません。まずは年貢収納高ですが、年貢収入を6万俵と見積もっていますが、これは天候に恵まれ順調な出来具合の時のことであり、矢作川の洪水などの被害を受けると収納高は

改革スタートにあたり、中根隼人が家臣に「惣まくり」を拝読させて意志統一を図る場面（柄澤照文氏画）

《中根隼人忠容画像（部分）》　個人蔵

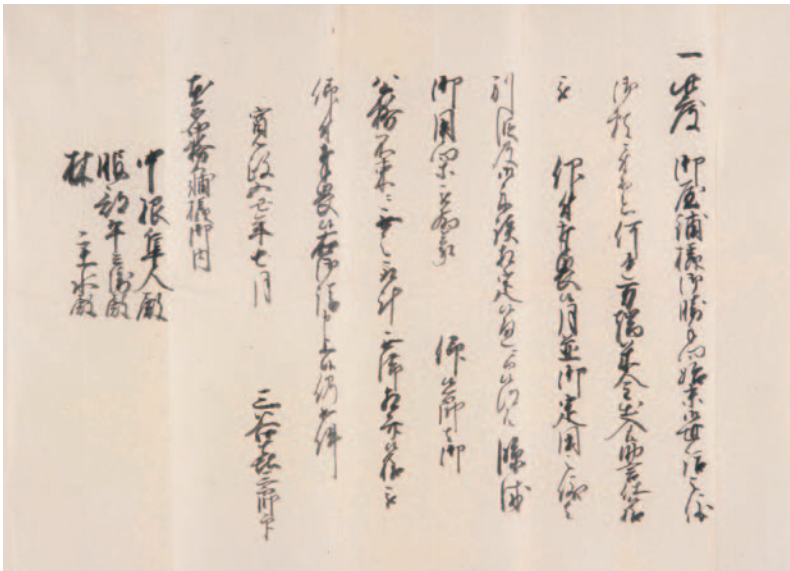
5万俵を割ることがあります。改革が始まる前の寛政元年の洪水時には4万6000俵ほどまで年貢収納がおちこんでいます。また、藩の出費額も定式の7500両でおさまらず、臨時出費もあります。また、米相場というのも改革の成否に大きく影響します。幸い、中根の改革期間のうち、寛政五年から同九年頃までは天候に恵まれ、米相場も安定していたために約1万両の余剰金を生み出しています。しかし、改革が断絶する寛政11年末にかけては藩の出費が嵩み、1万両の余剰金も半減しています。

中根隼人の改革においてポイントになるのが、年貢6万俵の半分が宛てられる家中扶助です。現代風にいうならば、自治体の財源である一般会計額の半分を職員の人件費が占めるということになるでしょう。家臣の扶持に宛てられる財源比率が高いことは、当時においても大きな課題でした。改革が始まる前の寛政4年から5年にかけて困窮する本多家の再興をもとめて幕府の中心メンバーに中根は相談を持ちかけますが、当時の幕閣であった本多忠籌（ただかず）から出された意見に家中扶助への財源をこれまでの半分である1万5000俵とする案が出されました。極端な言い方をすれば家臣の数を半分とするリストラ案です。これに対して中根は強く反対します。岡崎藩本多家には、徳川家康および家祖忠勝以来付き従う由緒ある家臣が多く、これらの家臣を解雇することは譜代大名である本多家においてはできないというのが理由でした。改革で中根とペアを組んだ服部平兵衛の発言を借りれば、「重代の家来というのはお金では買うことのできない財産である」と、幕閣に言い切っています。そのために中根が選択したのが、経費削減のための倹約でした。

中根をリーダーとする改革は、江戸両替商である三谷（みたに）喜三郎の援助をうけるものでした。藩では改革期間中は借財の返済、さらには他からの借財を停止しましたが、藩の資金はすべて江戸両替商である三谷喜三郎を通じて藩に出金されていました。長年わたり岡崎藩本多家に出資してきた大坂の蔵元（くらもと）であった升屋・平野屋に替わり採用された三谷喜三郎が江戸において蔵元としての役割を果たしていたのです。三谷喜三郎は、幕府の寛政改革において幕府勘定所御用達メンバー頭取に採用された三谷三九郎の一族であり、三谷一族は当時の江戸金融界で中心的役割を果たしていました。残念なことに中根の改革は、寛政11年末に突然起きた三谷喜三郎店の倒産により中絶してしまいます。

中根がリーダーとして敢行した改革には、東北諸藩の藩政改革にみられるような殖産興業による藩収入増加をめざす動きが見られません。もっぱら、倹約による自助努力と江戸資本の力に頼るものでありました。この点、約半世紀後の安政改革と比較すると、推進役となったのが下級武士層から採用された長尾・塩田氏であったこと、在地資本を利用したことに大きな相違点があります。門閥譜代である中根隼人の改革断行に限界があったとはいえ、その改革は破綻した財政問題が放置されるなか、果敢に財政再建の可能性を模索したことにおいて岡崎藩政史上に特筆されるべきものでしょう。

以上、中根隼人の改革に触れてきましたが、展覧会では財政改革のほか、中根家所蔵資料のなかでも特色となる城絵図、さらには岡崎藩武士の城内での生活ぶりを示す資料などを合わせて約150点を紹介します。なかでも岡崎在住・ペン画家柄澤照文さんによる絵画作品は、改革の内容をわかりやすく紹介してくれるでしょう。ご期待ください。



《三谷喜三郎勝手向御世話の請書》　個人蔵

INFORMATION

■展覧会スケジュール

2007年10月13日(土)～2007年11月25日(日)

特別企画展　茶の藝術　～大和文華館のコレクションより

奈良にある大和文華館のコレクションからお茶をテーマに構成します。展示は国宝・重要文化財を含む美術品と、雙柏文庫（同館の所蔵）と称する歴史家の故中村直勝博士の貴重な文書を合わせ130点で紹介します。

2007年12月8日(土)～2008年2月11日(月･祝)

中根家文書　刊行記念展　隼人がゆく ―藩政改革にかけた岡崎藩士の世界

岡崎藩士中根家に伝わる古文書が刊行されたのを記念して、同文書が語る世界をわかりやすく紹介します。なかでも中心となるのが中根家8代隼人忠容がリーダーシップを執った藩政改革です。改革に藩士生命をかけた忠容の生涯と改革の全貌を中根家に残された資料により紹介します。

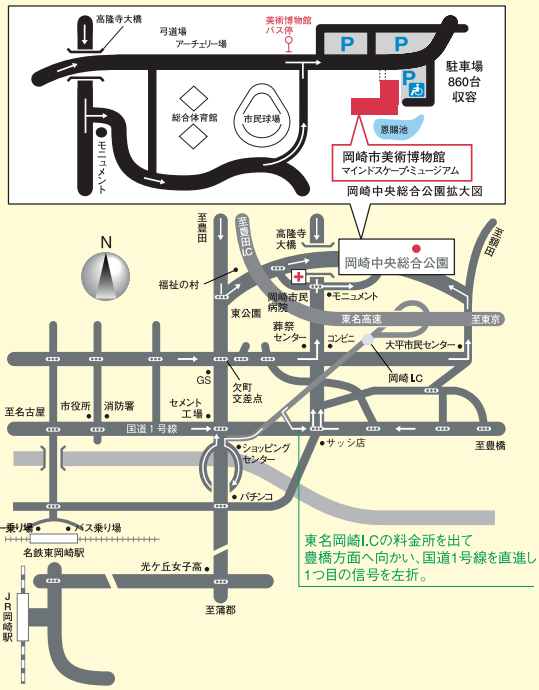
2008年2月16日(土)～2008年4月13日(日)

新収蔵品展

平成18年・19年度で購入・寄附・寄託により収集された収蔵品のなかから主なものを紹介します。

●開館時間／午前10時～午後5時（10月13日～4月13日）
〈入館は閉館時間の30分前まで〉
●休　館　日／毎週月曜日（祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日）
年末年始（12月28日～1月3日）
※展示替えのため臨時休館することがあります。

◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、
（名鉄バス）　「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
◎タ　ク　シ　ー／名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
◎自　家　用　車／東名高速道路・岡崎I.Cから約10分



OKAZAKI
CITY MUSEUM

【岡崎市美博ニュース／アルカディア】
●Arcadia　第34号　●2007年10月発行　●編集・発行　岡崎市美術博物館（マインドスケープ・ミュージアム）

岡崎市美術博物館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL0564-28-5000（代表）
ホームページ　http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html

PRINTED WITH SOYINK
R100 本紙に古紙配合率100%再生紙を使用しています。